

2023年3月17日

藤代歴史愛好会 石山博

銅鐸文明の人びと（天皇前史について）

銅鐸は出雲王朝の持っていた神宝か

南船北馬説（室伏 志畔氏）というのがあります。交通手段に、長江下流の人が船を使い、北方騎馬民族は馬を使った。その違いで、南船系の倭人と北馬系の倭人を考えますと、日本というのは紀元前の5世紀から4世紀頃に長江下流にあった、呉や越の亡国の民が、呉越同舟して黒潮分流に乗って、韓半島や日本列島にやってきました。この人達が王権を作っていたと考えられます。古代王権は日本海側を流れたと言えます。

古田武彦氏はどこに王朝の起源を見たかという点で呉や越の王権ではなく、あとから天孫降臨で、侵攻してきた朝鮮半島経由の北馬系の倭人の王朝を九州王朝としました。その前には、南船系の倭人の王権があったということになります。日本の古代史は、東アジアの民族移動史の1コマであって、その基本矛盾というのは南船系の倭人と北馬系の倭人の抗争・興亡にある訳です。

王朝の交替史を、出雲王朝、九州王朝、近畿王朝という変遷の中で考えますと、銅鐸の消滅した3世紀が、いわゆる出雲王朝に替わり、九州王朝が列島の盟主になったと言えるのではないのでしょうか。

銅鐸について記紀は何も書いていません。なぜ書かないのかということもまた大きな意味があると思います。これは当然隠したという事になると思います。九州王朝にとって最大の敵の持っていた神宝が銅鐸であったという事は、九州王朝の分派から出てくる皇統にとって（いわゆる皇室にとっては）どういう働きをしていたかという点、それを潰しに行ったその役をしていたのが皇統だと考えられるからです。

皇室というのは、皇統一元史観で、我々は遠い昔より列島を支配していた。それも畿内でやっていたということになっていきました。それが銅鐸が別のところから出てきたという事は困った話になってくる訳です。それで一切書かない、説明しないことになったと考えられるのです。

また、記紀には、神代と人代が書かれています。神代は出雲神話が中心にあって、人代は神武東征からの皇室の歴史になってきて書紀では、持統天皇まで続いています。ということは人代は皇室に直接関係のある歴史で、それ以前の歴史は神代という事になっています。しかし歴史ではないとは言ってません。

今までは、神代はあるけれど論じないほうが良いとされていました。代表的な人物は、江戸時代の山片 蟠桃（やまがた ばんとう）や戦後の津田左右吉などがおりました。

本当は皇室史の前に出雲王朝などが神話として語られていると解釈されます。つまり天皇前史が書かれていることになります。

解説：山片 蟠桃（やまがた ばんとう、延享5年/寛延元年（1748年） - 文政4年2月28日（1821年3月31日））は、江戸時代後期の商人であり学者。極めて唯物論的な立場を取り、天文、宗教、経済、歴史等を百科全書的に論じた『夢の代』は、無鬼論（無神論）の主張、地動説の支持、応神天皇以前の日本書紀の真実性の否定など先進的な持論を展開した点が特筆される。出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：津田 左右吉（つだ そうきち、1873年（明治6年）10月3日 - 1961年（昭和36年）12月4日）は、20世紀前半の日本の歴史学者・思想史家。『古事記』や『日本書紀』、特に神話関係の部分は後世の潤色が著しいとして文献批判を行った。出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

さて、以前は銅鐸文化圏と銅剣・銅矛文化圏という説が有りましたが、1984年と1996年に、出雲の神庭荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡が見つかりました。神庭荒神谷遺跡では、今までの出土数を上回る、358本の銅剣が見つかりました。しかし銅剣と言われているがあれは銅矛と考えられます。加茂岩倉遺跡では、39個の銅鐸が見つかりました。

このことは、明らかに、出雲王朝があったとなる訳ですが、通説は、皇統一元史観です。でまだ正式には認められてはいません。銅鐸について言えば、39個の銅鐸が見つかったという事は、近畿圏の前に出雲に銅鐸王国があったと考えられます。これは何を意味するのでしょうか。

ヤマタノオロチ退治で成敗されたヤマタノオロチ族（八雲族）の神宝だったと考えられます。さらに言えば、「八雲やくも立つ 出雲いづも八重垣やへがき 妻籠つまごみに八重垣作る その八重垣を」は、嘆きの歌ではないか。妻籠つまごみとは「手籠てごめ」ではないか。スサノオ軍の侵攻の際人民への凄惨な行為を象徴しているのではないか。

ちょうど六月晦大祓（みなづきのつごもりのおおはらへ）の祝詞のりにある、国津罪の「母と子を犯せる罪」と同じではないのか。八重垣とは掟・法律の事で、法律が有るにもかかわらずこのような事が行われた事と考えられます。

「以下に、六月晦大祓祝詞の「国津罪（部分）」を示します。これは国譲りの侵略戦争の際の犯した罪を示していると考えられます。これらを含め罪を払うのが祝詞の目的です。

くにつつみと いきはだたち しにはだたち しろひと こくみ おのがははおかせるつみ おのがこおかせるつみ

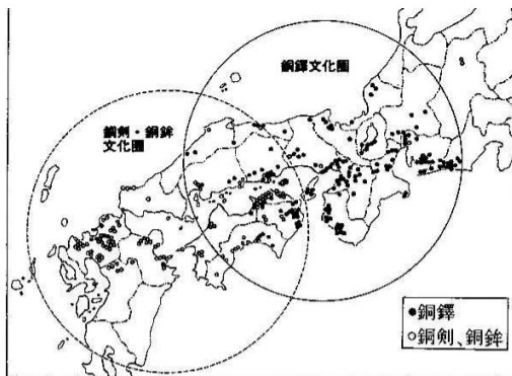
国津罪と 生膚断 死膚断 白人 胡久美 己が母犯罪 己が子犯罪

ははとことおかせるつみ ことははとおかせるつみ けものおかせるつみ

母と子と犯罪 子と母と犯罪 畜犯罪 （以下略）」

ところが記紀文化というのは、そういう凄惨・恐ろしい事柄等を相聞歌（恋の歌）の方にはずらして記述しています。だから日本人は昔から平和であって、そんな凄惨な・恐ろし

い事など無いと思わせられてしまった。実際は、おぞましい光景は、記紀や大祓の祝詞に書かれているように侵略戦争の中では繰り返されたと考えられます。



銅鐸について言えば、出雲が侵略を受けたので、その銅鐸勢力が逃げていったのが、近畿地方であると考えられます。図の銅鐸文化圏というのは、出雲の銅鐸文化圏が敗れたあとの勢力図だったと考えられます。

侵略者は、どういう人達かというそれは銅剣・銅矛を持った人達という事になります。しかし神庭荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡で発見されたものは、銅剣・銅矛と言われていますがあれはどちらも銅矛と考えられます。なぜならば、古来から出雲の神（大国主）は、八千矛神（やちほこのかみ）と言われてるからです。やはり矛と考えたほうが良いのではないのでしょうか。

出雲王朝があって侵略されて、人々は畿内に、東へ逃げた。敵は西からやってきたという事になります。神庭荒神谷の358本の銅剣の発見というのはどういう事かといいますと大国主の国譲りを示しているのではないのでしょうか。出雲が侵略を受けたので、その銅鐸勢力が逃げていったのが近畿地方で、図の銅鐸文化圏というのは後々の状況を示していると考えられます。しかし国譲りが終われば、畿内勢力も侵略の対象となって、最終的には、畿内の銅鐸文化圏も3世紀頃には、滅ぼされてしまった。

3世紀というのは、九州王朝支配の確立で、国譲りとは、出雲王朝から九州王朝への国譲りの事であって、大和朝廷への国譲りではありません。それを大和朝廷への国譲りのように見せているのが、記紀だといわれています。

八雲王朝はどこにあったのでしょうか。 加茂岩倉遺跡の場所は、大原郡です。当時の地図や『出雲国風土記』によると9つに分かれています。

（意宇・島根・秋鹿・楯縫・出雲・神門・飯石・仁多・大原の各郡）。大原郡、ここが出雲の別名大国（州）といわれている所です。

出雲王朝は、出雲郡のスサノオから始まり、他の8郡を従えたのでヤマタノオロチ退治の話にしたと考えられます。たぶん越の国の八族ではないかと思われます。それは冒頭で述べましたように、呉や越の亡国の民が、呉越同舟して黒潮分流に乗って列島にやってきた人達ではないかと考えられます。丹後半島には、船がそのまま入れる船宿（写真：伊根町）があります。あれは越の地方の風習だといわれています。



須佐之男命の娘である須勢理毘売命（すせりびめのみこと）に婿に入ったのが、大国主（大穴牟遲神おおあなむち）ですが、実はスサノオを手引きしたのではないか。これは

2つの勢力（征服・被征服）で、妥協が成立し始めているのではないのか。畿内での銅鐸文化の復活を象徴しているのではないのか。出雲系の復活ではないのかと考えられます。

最初にヤマタノオロチ退治で侵略されたのは、八雲系の多氏だと考えられますが、その後国譲りによって出雲系の多氏が逃れていったのは畿内の三輪山の麓です。唐古・鍵遺跡（からこ・かぎいせき）は、八雲系の多氏と出雲系の多氏によって開かれ、後にニギハヤヒ系の物部氏も関わって、巻向遺跡に発展する形になってくる訳です。だからあれは天皇家によって作られた遺跡では無い事になります。

解説：多氏（おおし／おおうじ）は、「多」を氏の名とする氏族。

日本最古の皇別氏族とされる。「太」「大」「意富」「飯富」「於保」とも記され、九州と畿内に系譜を伝える。皇別氏族屈指の古族であり、神武天皇の子の神八井耳命の後裔とされる。出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：皇別（こうべつ）とは、日本の皇室から、神武天皇以降に臣籍降下した分流・庶流の氏族を分類した用語。弘仁6年（815年）に朝廷が編纂した古代氏族の系譜集『新撰姓氏録』で、天津神・国津神の子孫を指す神別、朝鮮半島・中国大陆その他から渡来した人々の子孫を指す諸蕃とともに用いられた。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：唐古・鍵遺跡（からこ・かぎいせき）は、奈良盆地中央部、標高約48メートル前後の沖積地、奈良県磯城郡（しきぐん）田原本町大字唐古及び大字鍵に立地する弥生時代の環濠集落遺跡。出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：纏向遺跡（まきむくいせき）は、奈良県桜井市の三輪山の北西麓一帯にある、弥生時代末期から古墳時代前期にかけての集落遺跡。国の史跡に指定されている。

3世紀に始まる遺跡で、一帯は前方後円墳発祥の地とする研究者もいる。邪馬台国の中心地に比定する説があり、箸墓古墳などの6つの古墳が分布する。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：ニギハヤヒ：『日本書紀』などの記述によれば、神武東征に先立ち、天照大神から十種の神宝を授かり天磐船に乗って河内国（大阪府交野市）の河上の地に天降り、その後大和国（奈良県）に移ったとされている。『先代旧事本紀』では、物部氏、穂積氏、尾張氏、海部氏、熊野国造らの祖神と伝える。出典: フリー百科事典『ウィキペディア』

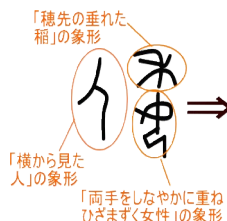
解説：二中歴にちゅうれき 鎌倉時代の百科事典。13巻。編者未詳。鎌倉末期の成立で、現存の増補版は文安年間（1444～1449）ころの成立とされる。平安時代の「掌中歴」と「懷中歴」を再編集したもので、人名・物名などを81項目にわたって列挙している。出典：デジタル大辞泉

そしてこれらを滅ぼしたのは、九州の勢力であった。九州勢力も最初の王というのは金印国家（漢委奴国王印）の委奴国です。通説では、まだ漢委奴国王印（かんのわのなのこくおういん）と呼んで倭国の属国の奴国としていますが、あれは委奴国（いぬこく）が貰ったとの解釈が正しいと考えられます。読み：委・・・イ(呉)(漢) 奴・・・ド(漢)ヌ(呉)

イヌというのは、現在「あいつはイヌにも劣る」といわれる様に侮蔑語にも使われていますが、これは最初に王国を作ったイヌ系の王族を卑しめる言葉と考えられます。なぜイヌが大事にされるかといいますと、中国の長江地方に、イヌを祖先と考える種族（シェ族）等があります。彼らの伝承によればイヌが尻尾に稲穂をつけて帰ってきたことで稲作がはじまったとしています。それで彼らは豊かになっていったと伝承されています。

金印の委奴国（いぬこく）、魏志倭人伝にも中に出てくる狗（いぬ）という漢字が使われている国が半島側（狗邪韓国）にも、九州側（狗奴国）にもあります。このイヌ系とは、南船系倭人の国の事を意味し、北九州から韓半島の南側にわたって倭国があったと示唆しているようです。 **また「書紀」にある隼人の吠声（はいせい）と神事・祭事における警蹕（けいひつ）先払いの音が、イヌ系の王族の儀礼をとどめていると考えられます。**

解説：警蹕（けいひつ）：天皇や貴人の通行などのときに、声を立てて人々をかしこまらせ、先払いをすること。また、その声。「おお」「しし」「おし」「おしおし」などと言った。みさきばらい。みさきおい。けいひち。出典: goo 国語辞書



また倭国の倭という文字は、漢字学者によると稲が実って穂を垂れている姿で、実りの姿を表していると言われています。いわゆる倭国、倭人というのは、稲作国、稲作民を表しているのではないのでしょうか。決して卑語ではないと思われます。

最終的には、畿内の銅鐸文化圏も3世紀頃には、滅ぼされてしまった。3世紀というのは、九州王朝支配の確立で、国譲りとは、出雲王朝から九州王朝への国譲りの事であって、決して大和朝廷への国譲りではない。と述べました。

それでは、九州王朝は、いつできたのでしょうか。これは二中歴（年代歴）に書かれています。この中には**継体から大化までの31の年号**が書かれています。

その最初の説明に、年始五百六十九年でそのうち無年号が39年あって、継体（517年）が始まったと書いてあります。最後の九州年号は「大化」です。

「 二中歴 年代暦 （付西暦年数） ・・・・P15～P16 参照のこと

年始五百六十九年内世九年無号不記支干其間結繩刻木以成政

継体 五 元丁酉 五一七～五二一 （～略～） 大化 六 乙未 六九五～七〇〇

覧初要集云皇極天皇四年為大化元年

已上百八十四年々号世一代（不）記年号只人傳言 自大宝始立年号而已

上記を見ると、始まって569年と書いてあります。継体が517年ですから、569年遡ると、517-569=▲52年（紀元前）になります。つまり紀元前52年が九州王朝が生まれたと考えることができます。まだこの時期に列島を支配できていなくとも、倭国としての金印国家（漢委奴国王印）の委奴国が、生まれてきたと考えられます。

その頃は出雲王朝の時代に当たります。出雲王朝はいつ頃なのでしょう。銅鐸というのは紀元前2世紀～紀元後2世紀末頃までの約400年間が銅鐸時代です。これが出雲が中心の時代であったと考えられます。

二中歴（年代歴） 最後の文は、「以上百八十四年、年号三十一代、年号は記さず。只、人の伝えて言う有り『大寶（大宝）より始めて年号を立つのみ』」と読み下すべきものと考えられます。

つまり、年号は一八四年間三十一代にわたり使用継続してきたが（事情があり）今はそれを記さない、しかし、「大寶（大宝）」から始まったと言うのは言い伝えに過ぎない（以前からあったのだ）と言っているのです。（701年：大宝建元です）

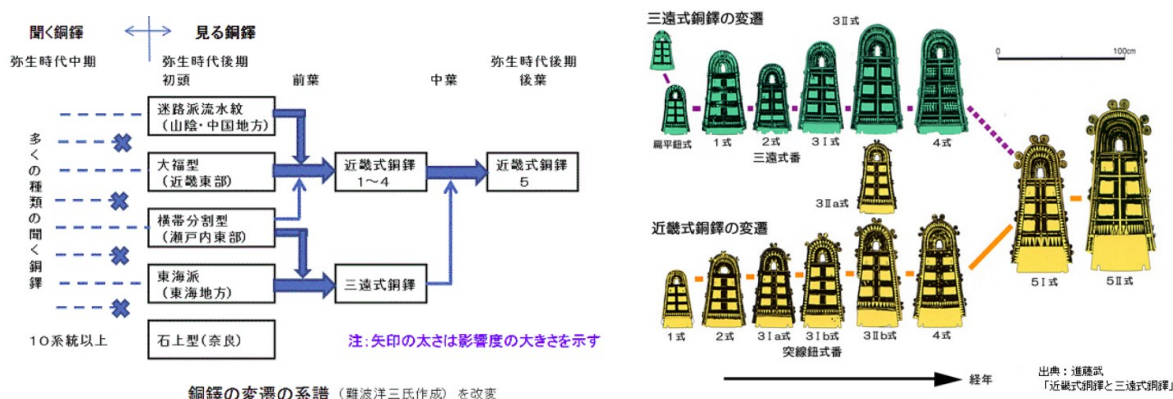
銅鐸文化圏のところで、出雲が侵略を受けたので、その銅鐸勢力が逃げていったのが、近畿地方であると述べましたが、今度は考古学から見ると滋賀県守山市の伊勢遺跡（東西700m南北450m30ヘクタール）で環濠集落が見つかりました。

ここは縄文時代から室町時代にかけての複合遺跡であり、特に弥生時代後期の国内最大級の大型建物群で知られています。

さらに野洲川下流域の銅鐸・青銅器の特徴について見ると、野洲市の大岩山では、24個の銅鐸（どうたく）が出土しており、一ヶ所から見つかった銅鐸の数としては、島根県の加茂岩倉遺跡の39個に次いで多い数です。大岩山銅鐸には、日本最大の銅鐸が含まれています。また、栗東市の下鉤遺跡からは日本最小の銅鐸が見つかりました。

そのほか近江南部での銅鐸、青銅器に関して特徴的なことは：

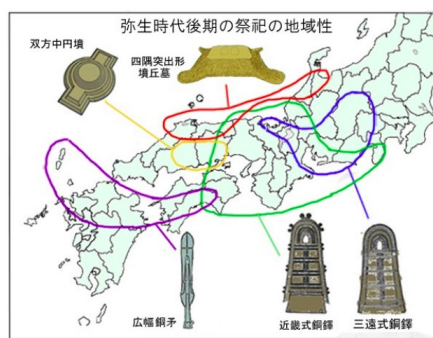
- ①もっとも古い銅鐸から新しい銅鐸まで100～150年にわたるいろいろな銅鐸が出ている
- ②ここで銅鐸の形式の統合が行われたと考えられる（下図）
- ③銅鐸祭祀の最後を飾って大岩山に多量に埋納された
- ④銅剣が出土する最東地点である・・・こと。



大岩山銅鐸弥生時代を特徴付ける金属器として、銅矛（どうほこ）、銅剣、銅戈（どうか）、銅鐸などがあります。地域と時代によって何を祭祀に用いていたかが異なりますが、野洲川下流域では、銅鐸の祭祀が弥生時代を通して行われていました。

明治14年（1881年）に野洲市小篠原の山の中で遊んでいた子供によって、14個の銅鐸が偶然見つかりました。また、昭和37年（1962年）、東海道新幹線の工事に関連して10個の銅鐸が見つかりました。平成8年（1996年）加茂岩倉遺跡で39個の銅鐸が出土するまでは、1ヶ所で発見された銅鐸の数としては、日本最多でした。また、総長135cmと、群を抜いて大きな銅鐸が見つかっており、日本最大の銅鐸です。

銅鐸は入れ子にし、向きを揃えて、聖なる三上山の麓に埋納されており、弥生時代の幕引きの祭祀が行われたと考えられています。これらの銅鐸の特徴は、大福型、近畿式、三遠式などいろいろな形式のものがあること、また製作時期についても西暦50年ごろのものから西暦150～200年頃のものまでいろいろな時代の銅鐸があることです。



出典：寺沢薫「玉権誕生」に基づき作成

銅鐸表面に付けられている文様も、流水紋のものが1個ありました。バリエーティに富んだ銅鐸の種類から考えると、びわ湖周辺の拠点集落それぞれが保有し、祭祀を行っていた銅鐸を持ち寄って、埋納祭祀をおこなったと考えられています。

埋納場所も、明治と昭和に発見された場所が50mほど離れており、2回に分けて埋納されたと解釈されます。ただ、昭和に見つかった流水紋銅鐸1個はさらに50m離れた所から見つかっており、3回埋納説もあります。

銅鐸の用途ですが、主として弥生初期末から中期につくられた小～中型の銅鐸は音を鳴らして「聞く銅鐸」で、弥生後期の中～大型銅鐸は飾って「見る銅鐸」と言われています。すなわち銅鐸の用途は、中期と後期で大きく異なっていました。

この観点で大岩山の銅鐸を見ると、主に中～大型の「見る銅鐸」になります。

大岩山に銅鐸を埋納した後は、鏡が祭祀に用いられるようになります。その後は、銅鐸は造られなくなり、大岩山の最大の銅鐸は、銅鐸の歴史では最新でかつ最後の銅鐸になります。



大岩山で見つかった銅鐸 【野洲市教委】



栗東市の下鈎遺跡からは、弥生時代中期の導水施設で高さ3.5cmの日本最小の銅鐸が見つかりました。

日本で数十個の小銅鐸が見つかりますが、「聞く銅鐸」や「見る銅鐸」とは違う目的で用いられたようです。大きな銅鐸が山麓や集落のはずれに埋納さ

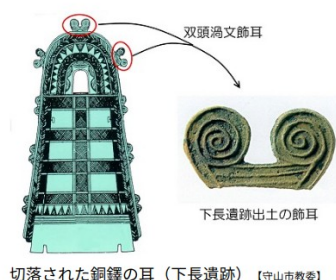
れるのに対し、小銅鐸は集落から見つかるケースが多いようです。下鉤遺跡の小銅鐸は、聖なる水を得るための儀式で鈴のような使い方をしたのかも知れません。

大岩山銅鐸の外にも、野洲川下流域と周辺で9個の銅鐸が見つっています。守山市の新庄では、銅鐸の歴史の中でも古い形式の新庄銅鐸が1個出土しています。江戸時代の記録では4個見つっていますが、現存するのは1個のみで倉敷市に保管されています。野洲川下流域に隣接する東近江市の山面で、新庄銅鐸に継ぐ古さの銅鐸が2点見つっています。9個の銅鐸は、全般に大岩山銅鐸よりも古い形式のものが多く、「聞く銅鐸」として使われていました。

大岩山で見つっている新しい世代の「見る銅鐸」と考え合わせると、近江地区では古くから「聞く銅鐸」の祭祀が行われ、弥生時代後期には「見る銅鐸」の祭祀に変容しながらも銅鐸を使った儀礼が続いていたことが判ります。

銅鐸は主に山陰、四国、近畿、東海などで使われていましたが、弥生中期（聞く銅鐸）～弥生後期（見る銅鐸）を通して使っていたのは近江を含む近畿だけです。

守山市の下長遺跡（しもながいせき）から銅鐸の飾耳が一点出土しています。下長遺跡は弥生時代後期に出現し、伊勢遺跡群の一つとして機能していました。しかし、下長遺跡が最も栄えるのが古墳時代に入ってからで、豪族の居館が建ち、河川・湖上貿易の拠点となります。すなわち、銅鐸の祭祀の終焉に立会い、その後の鏡の祭祀を行った遺跡です。



切落された銅鐸の耳（下長遺跡）【守山市教委】

そこから埋納したはずの銅鐸の飾り耳を切り落としたものが出土したのです。およそ70cmクラスの銅鐸の飾耳だと推測されますが、対応する銅鐸は見つかりません。

青銅器は非常に堅固で銅剣や銅矛として用いられるものもあり、銅鐸も叩いて割れるものではありません。また、簡単に切り落とせるものでもありません。でも、高温に加熱して柔らかくしたら切ることができます。銅鐸祭祀の終焉にあたり、これまで大切にしてきたものを忘れないために隠し持ったのか、

あるいはお守りとして残したのかも知れません。

銅鐸をつくる鋳型が多く見つかり、銅鐸の生産拠点と見なされていたのは、北九州と近畿の摂津（東奈良）、大和（唐古・鍵）などです。面白いことに多量の銅鐸が出土している、島根や淡路島、和歌山からは鋳型が出ていません。



上：土製鋳型の内面と下：外面



鋳型（服部遺跡）【守山市教委】



鋳型（服部遺跡）
【守山市教委】



鋳型と青銅残滓（下鉤遺跡）
【東海市教委】

一方、銅鐸の出土が極めて少ない北九州で銅鐸の鋳型が見つかっています。近江は銅鐸の出土も多く、銅鐸の鋳型や青銅器生産に関連するふいご部品が見つかっています。銅鐸の鋳型としては、守山市の服部遺跡や栗東市の下鈎遺跡、野洲市の下々塚遺跡から見つかり、とくに下鈎遺跡からは青銅残滓（ざんし）が出ており、青銅器をつくっていたのは間違いないと考えられます。

興味深いのは、服部遺跡から大阪湾型銅戈の石製鋳型の一部が見つかっていることです。銅鐸の鋳型も出ていることから服部遺跡で青銅品を鋳造していた可能性は強く、ここで大阪湾型銅戈を作って近畿湾岸圏へ供給していたと考えられます。唐古・鍵遺跡・東奈良（弥生中期）でも「見る銅鐸」の土製鋳型が多数見つかり、大岩山の近畿式銅鐸は地元で設計し製作していた可能性があります。

このように、野洲川下流域では弥生中期から後期にわたり銅鐸の祭祀を行っていて、銅鐸祭祀の終焉にあたり、大岩山に埋納して、弥生時代が終わっていること。さらに野洲川下流域には日本で最小の銅鐸と最大の銅鐸があることなどから、出雲から近畿圏への変遷を考えると、近畿式銅鐸はここで生産していた可能性があると考えられます。 出典：NPO 法人 守山弥生遺跡研究会 ホームページより部分掲載

信州・関東への脱出

銅鐸について言えば、国譲りで、出雲が支配された事により、近畿地方へ、次の段階で、更に2つの集団が東方（信州、関東）へ脱出したと考えられます。

1つは、タケミナカタ神に象徴される諏訪族で、各地に道祖神を分布させながら諏訪神社を建てていきます。今一つは、武蔵に足立郡をたてたアラ・アヤ族で、関東各地に氷川神社を創建し、やがて朝鮮半島からの渡来人「***今来のカラ人**」と共存しながら関東地方に広く展開していきます。（*古代、新たに帰化した人を云う。）

氷川神社の社伝によれば、孝昭天皇3年4月の創建という。「国造本紀」によると、初代无邪志国造（むざしのくにのみやつこ）の兄多毛比命（えたもひのみこと）は成務天皇（第13代天皇）の時代に出雲族をひきつれてこの地に移住し、祖神を祀って氏神として、当社を奉崇したという。この一帯は出雲族が開拓した地であり、武蔵国造（无邪志国造）は出雲国造と同族とされ、社名の「氷川」も出雲の簸川（ひかわ）に由来するという説があります。

一方、氷川神社の摂社に「門客人（カドマロウド）神社」がある（現在も氷川神社社殿の東隣に鎮座）。元々は「荒脛巾（あらはばき）神社」と呼ばれていたもので、アラハバキが「客人神」として祀られている。このアラハバキ社は氷川神社の地主神である。現在祀られている出雲系の神は、武蔵国造一族とともにこの地に乗り込んできたもので、先住の神がアラハバキとみられる。ちなみに、門客人は、カドマロウドと読むそうです。 ”火の神事”＝大湯祭は、どうやら門客人神社の祀りごと、の言い伝えのようです。門客人神社のことを調べて見ると、前述のように、出雲族がこの地にやってくる前の地元神だと

います。地元の民が先にいて、あとから出雲族がやってくる訳だから、なにか逆のような気がする。門客人神社のことを、荒脰巾（アラハバキ）神社とも言うとの事。”マロウド”とか”アラハバキ”とか、言葉が日本語とも思えなくなります。

このほか、景行天皇の皇子・日本武尊が東征の際に負傷し、夢枕に現れた老人の教えに従って当社へ詣でたところ、立てるようになったという伝説が残されている。このことから本地域を「足立」と称するようになったとされます。

解説：摂社【せっしゃ】神社の格式の一つ。本社に付属し、その祭神と縁故の深い神をまつた神社。本社と末社との間に位し、本社の境内にあるものを境内摂社、境外にあるものを境外摂社という。出典：精選版 日本国語大辞典「摂社」

解説：あらはばき神社は、記紀神話や伝統的な民話などに登場しない謎の神で諸説あるが、「荒覇吐」「荒吐」「荒脰巾」「阿良波々岐」などと表示され、現代でも全国各地の神社でひっそり祀られている。但し、客人神（門客神）となっている例が多い。これは、「元々は主神だったのが、客人（まれびと、まろうど）の神に主客転倒したもの」といわれる（地主神）。神社では、脰（はぎ）に佩く「脰巾（はばき）」の神、また「足の神」とされてきた。（多賀城市の荒脰巾神社の祭神「おきゃくさん」は、旅人らから脚絆等を奉げられてきたが、下半身全般をも癒すとされ、男根像も奉げられる。（金精神）
出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

神話では、大国主の子タケミナカタ（建御名方神）は高天原からやってきたタケミカヅチ（建御雷神）に術で破れた後、諏訪まで逃げ延びたとされ、諏訪大社の祭神となった。
一方で、諏訪地域に伝わる神話ではタケミナカタ（建御名方神：諏訪明神）が諏訪に侵入した征服者として描かれている。これによると先住神の洩矢神（守矢氏の遠祖）が建御名方神と対抗しようとして戦いを挑むも敗れ、最終的に諏訪の統治権を建御名方神に譲ったと言われている。

タケミナカタの逃走ルートはほぼ解明されていて。出雲の美保から逃れ、能登半島の入口石川県羽咋市（はくいし）の南隣、志雄しお町付近に逃げ、さらに船で日本海を北上し、越後から信濃川沿いに内陸に入り、長岡－長野－上田－武石峠－松本－塩尻を経て諏訪に入った。途中の上田市の生島足島神社（いくしまたるしまじんじゃ）では、「神代の昔、タケミナカタ神が信濃川を遡り、諏訪へ逃げようとして、この地に滞在した時、地元の人々が米粥を煮て献上した」という故事を、御籠祭として継承している。

大国主の国造りの頃の話として、辰野町の矢彦神社には、子のコトシロヌシ（事代主神）とタケミナカタ（建御名方神）を従え、当地に立ち寄ったとの言い伝えもある。

『諏訪明神絵詞』によれば、「古い時代に外部からタケミナカタの神が侵入してきた時、それを天竜川河口で迎え撃ったのがモレヤの神であったが、戦いに敗れた」と記されている。つまり、タケミナカタは外来の神で、先住民の神はモレヤの神とミサクチの神であった。戦いに勝利したタケミナカタは諏訪大明神となり、負けたモレヤの子孫の守矢氏は神社

の筆頭神官となった。また守矢家は物部守屋と関係があるという説や家紋の「丸に十字」の島津家と同じ紋章は、「羊を象徴する古代シュメールの楔形文字」とする説もある。

解説：『諏方大明神画詞』（すわだいみょうじんえことば）は、長野県の諏訪地域に鎮座する諏訪大社の縁起。1356年（正平11年 / 延文1年）成立。全12巻。著者は諏訪円忠（小坂円忠）。

文明4年（1472）に、伊那出身の僧宗詢（そうじゅん）が高野山悉地院（しっちいん）で、先師盛円法師の所持されるものを借り、安居の間に筆写したもので、諏訪では上社権祝家に伝えられて「権祝本」とよばれ、のち神長官家にうつって、いまその家に所蔵され、県宝の指定を受けている。美濃紙六十一枚に筆書した詞章である。

「右の写真：権祝本」 出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』



冒頭でも述べましたが、出雲には荒神谷遺跡などから銅鐸を含む大量の青銅器が出土していますが、これは銅矛文明圏（天国、壱岐対馬）による銅鐸文明圏の出雲への侵略が「国譲り」という表現で語られているのです。

この侵略に最後まで抵抗した神が建御名方神（たけみなかた）です。彼は戦いに敗れ信州の諏訪湖まで逃げます。そして、その地から出ないことを条件に許されます。

天国（あまくに）の軍隊は、銅鐸文明圏の中枢領域である近畿にも突入を繰り返します。近畿から破壊された銅鐸が出土していますが、これもこの侵略の痕跡でしょう。

天国の軍隊は神聖なる祭器である銅鐸を破壊し、銅鐸文明の神々（人々）は東へ東へと逃亡したと考えられます。

その様子を「伊勢国風土記」では次のように記されています。天日別命（あまのひわけのみこと）が率いる天国の軍隊が伊勢の国を侵略し、伊勢の王である伊勢津彦は東へと逃げ、彼もまた信濃の国へ住んだと。

『注：伊勢国風土記逸文で、伊勢津彦は、本名を出雲建子命（いずもたけこのみこと）、またの名を伊勢津彦神、櫛玉命（くしたまのみこと）、『播磨国風土記』では伊勢都比古命と表記される。』

建御名方神や伊勢津彦はなぜ信州に逃げたのでしょうか。そして、なぜ天国の軍隊は信州に逃げた彼らを捕らえなかったのでしょうか。ここに、信州が持つ不思議な歴史の謎があります。

他方、これと共通する風習が中世ドイツにもありました。追われた犯罪者が四本の柱で囲まれた場所に逃げ込めば、役人も手出しができなかったと言われています（阿部謹也『中世の星の下で』ちくま文庫）。

四本の柱の中は神聖な地、歴史学でアジールと呼ばれる空間なのでした。

これは諏訪大社の御柱とそっくりです。古代信州は軍隊と言えども侵すことのできない神聖な地、アジールだったのです。だから、追われた銅鐸文明の神々は信州へと逃げた、そう考えられます。そして、この考えが正しければ、諏訪大社の御柱祭は弥生時代以前にまで遡ることになります。古代日本での文明の衝突を考えると、信州のもつこの神聖性はキーポイントとなるのではないのでしょうか。

解説：アジールあるいはアサイラム（独：Asyl、仏：asile、英：asylum）は、歴史的・社会的な概念で、「聖域」「自由領域」「避難所」「無縁所」などとも呼ばれる特殊なエリアのことを意味する。ギリシア語の「ἄσυλον（侵すことのできない、神聖な場所の意）」を語源とする。出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

もう一つの神ミサクチ神は、「巨木・巨石・光った岩など樹木の上に降りてくるナイーブな神」とされます。ミシャグチ神（ミサクチ神）は、自然万物に降りてくる精霊と言われます。ミシャグチ神は洩矢神の後裔の神長官（守矢家）邸の一画に祭られています。守矢家で現在 78 代目となっています。一子口伝の秘事として伝えられてきていましたが、2～3 代前（明治維新により）に多くが失われたようです。

「守矢神長家の話（守矢早苗）より」 諏訪大社の祭政体はミシャグチ神という樹や笹や石や生神・大祝に降りてくる精霊を中心に営まれます。家ではミシャグチ様と呼んでいましたし、多くの呼び名や宛字のある神様ですが、ここではミシャグチ神とします。



そして、一年に七十五度の神事が、中世までは前宮と大祝の住む神殿、そして冬季に掘られた竪穴である御室や十間廊、八ヶ岳山麓の御射山（現・諏訪郡富士見町）で行われました。そのミシャグチ神の祭祀権を持っていたのが神長であり、重要な役割としてのミシャグチ上げや、ミシャグチ降ろしの技法を駆使して祭祀をとりしきっていました。左の写真：市史跡の「神長官守矢邸跡」



ミシャグジ、ミシャグジ様、ミシャグチ、ミサグチと呼ばれます。またそれを祀っていた諏訪の氏族、守矢（洩矢）氏の姓から、モレヤの神、モレヤ様などとも呼ばれます。漢字では、御社宮司や御射宮司等と書かれます。

諏訪湖の土着神で、縄文時代から祀られてきたともされています。現在でも諏訪大社（特に上社）に祀られ、蛇神、また御射山をご神体とする山神で、ミシャグジ降ろしの祭祀において憑依託宣（ひょういたくせん）する神です。

この地方の伝承によれば、元々は何柱かの土着神がいたようで、それが次第にミシャグジに集合されていったと考えられています。現在は神格として、蛇神（山神）兼、狩猟神となっています。古くはモレヤ神が木石の神、チカト神が狩猟の神、ソソウ神が蛇神などとして、別々の神格として祀られていたようです。



縄文時代の守り神 ミシャグチ神

ミシャグチ神をアラハバキ神の仮の姿とする見解があるが、縄文時代に遡る神ではあるが、まさか一神教の時代でもあるまいし、積極的にアラハバキ神とする根拠は乏しいのではないか。どちらかと云えば「石神」ではあるまいかとする『神社を中心とした宝飯郡史』の説は興味深い。
出典：守矢早苗（「神長官守矢資料館のしおり」より）

諏訪大社は平安時代には南方刀美（みなかたとみ）神社と呼ばれていた。（延喜式神名帳）そうすると、「建御名方(タケミナカタ)」は南方の武人ということになり、トミは蛇を表す語で蛇神族は金属精錬とも深いかわりを持つ。

諏訪大社には種々の祭事が伝わる。「御室神事」という縄文色の濃い祭事は、ミサクチ神と思われるご神体と“そそう神”という蛇神が12月末から3月まで竪穴の中で一緒に過ごす祭という。

ミシャグチとソソウ神（『竪穴斎屋の原始性霊』より）

湖の方角から、神域の北限、有賀のこしき原附近、そして真志野、それに、神原の入口の道俣(みちまた)に 所末戸(ところまつ)社(土地をまつという意味)に出場する水平に訪れて来る神であり、地主神の性格をもっているようだ。この神は、「そそう神まわり給たれば、うれしみよろこひてつかへまつりぬ」と申立にあるように狂喜してむかえる神で、動物犠牲を要求する神である。

そして、御室内の小蛇や大蛇三体に向ってこの申立をするところをみると、ソソウ神は蛇体であると考えられる。御左口神は上空より垂直降下し、ソソウ神は諏訪湖の方より水平的に訪れ、御左口神は巢をなす恐怖すべき男性的精霊であり、ソソウ神は狂喜して迎える女性的精霊である。それは蛇体をもって現わされる。

全く性格を異にする精霊が御室の内部、萩組の座において婚姻する。

出典：「諏訪信仰の発生と展開」 古部族研究会

また諏訪神社には古代ユダヤの伝承と関わりとされる御頭祭（おんとうさいー「アブラハムが我が子イサクを神のお告げにより殺そうとする」のとそっくりな神事）があるが、ミサクチも「ミ+イサク+チ」で、チは（神）大蛇または精霊であり、イサクとつながる神ではないかと言われます。

鉄鐸について

『先代旧事本紀』と『古語拾遺』が記す「天岩屋戸」条に、天岩屋戸に籠った天照大神を招きだすために、天目一箇神（あまのめひとつかみ）が種々の刀・斧・鐵鐸（古くは佐那伎〔さなぎ〕と言う）を作ったとあります。この時の鐵鐸が鑄造か鍛造（たんそう）か、製法は分かりません。



そして天鈿売（あめのうずめ）が、鐵鐸を付けた矛を手にとって樽の上で踊ったとあることから、往時は矛や杖などの器具に音を出す飾りとして使用したと思われます。なお、鐵鐸は古墳時代まで見られ、その時代の鐵鐸は、扇形、あるいは台形に裁断した鉄板を丸めるように両端を合わせて鐸身としており、鍛造で作ったとみられます（早野浩二「古墳時代の鐵鐸について」研究紀要 第9号 2008年 Web）（上図）。）



また、藤森栄一著「銅鐸」学生社刊(s39.8.5 初版)によれば、いま国内の古社で鐵鐸を蔵するもの、諏訪神社上社、小野神社、上伊那郡小野村矢彦神社である。諏訪神社には、現在六口ずつ三組あり、形状・大きさは大同小異である。（左図）。

社伝によると往古神使の巡回に使用した宝鐸で、室町時代には、これを打ちならして誓約の証とした記録がある。天文4年（1535年）、武田信虎と諏訪頼満の和睦の際に、神長の守矢頼真が鐵鐸を鳴らしたという。古来の神宝中でも、特別な位置を占めた重宝である。製作の時期については、資料及びそれ自体に記録がないのでわからないが、相当年代までさかのぼりうることは否定できない。諏訪大明神画詞には、「大鈴ノゴトシ」とあり池原香穉（いけはらかわか）のみともの数には「さなぎの鈴」と記しており、神社では宝鈴とよんでいる。

古典にいう佐奈伎がこれにあたるのだろう。（以上 藤森栄一著「銅鐸」より引用。）

これらは、出雲王朝が侵略され、信州・関東へ逃げた。その末裔の神宝と考えられます。

【常陸の出雲神話について】

また常陸国には、多くの出雲神話がまるでこの土地の神話であるかのように言い伝えられています。その神話についてよく調べてみると、その殆どが出雲での国譲りに関係した神様が（注）常陸国にて再生し、常陸国における蝦夷征討で活躍していることを言い伝えています。

朝廷の勢力が拡大し、（弥生人：渡来人）による国内統一が進む中で、常陸国内で繁栄していた蝦夷族も抵抗しきれず東北地方に追いやられることになりました。日立の大甕神社社伝には、その経緯が、鹿島神宮の祭神「武甕槌命」に抵抗した蝦夷の雄「星香々背男伝説」として伝えられています。

このため鹿島神宮の本殿は、今も大甕神社の方角、北向きとなって蝦夷に対峙しています。

（注）「大洗磯前神社（おおあらいいそさきじんじゃ）」の縁起による。

年代歷

羊始五百六十九年內廿九年方不記文十六

同結繩刻木以成文

建軒五羊 元丁酉

正和五羊 元丙午

僧聽五羊 元丙辰

貴樂二羊 元市

兄陽六羊 元辰

師步一羊 元

金光六羊 元

鏡當四羊 元

端政五羊 元

順緒四羊 元

定結七羊 元

善記四羊 元壬寅

教到五羊 元辛卯

明照一羊 元辛酉

法清四羊 元甲戌

藏和五羊 元乙亥

和德一羊 元

休德一羊 元

勝顯四羊 元

普善七羊 元

光元六羊 元

傳宗五羊 元

仁平一羊 元

合長七羊 元

自雅九羊 元

朱雅二羊 元

大化六羊 元

慈上五羊 元

自文寶始五羊 元

信軍五羊 元

帝也五羊 元

自鳳三羊 元

朱雅九羊 元

大化六羊 元

慈上五羊 元

自文寶始五羊 元

大寶五羊 元

恭孝五羊 元

天子勝寶八箇羊 元

天平神寶二箇羊 元

寶龜一羊 元

大同四羊 元

和順一羊 元

天平神寶二箇羊 元

天平神寶二箇羊 元

神寶一羊 元

延曆二十四年 元

天長十一年 元

二中歴 年代曆 (付西曆年数)
 年始五百六十九年内廿九年無号不記支干其間結繩刻木以成政

繼体	五	元丁酉	五一七～五二一	善記	四	元壬寅	五二二～五二五 (同三年癸丑成始文善記以前武烈即位)
正和	五	元丙午	五二六～五三〇	教倒	五	元辛亥	五三一～五三五 (舞遊始)
僧聴	五	元丙辰	五三六～五四〇	明要	十一	元辛酉	五四一～五五一 (文書始出来結繩刻木止了)
貴樂	二	元壬申	五五二～五五三	法清	四	元甲戌	五五四～五五七 (法文〃唐渡僧善知傳)
兄弟	六	戊寅	五五八～五五八	蔵和	五	己卯	五五九～五六三 (此年老人死)
師安	一	甲申	五六四～五六四	和僧	五	乙酉	五六五～五六九 (此年法師始成)
金光	六	庚寅	五七〇～五七五	賢称	五	丙申	五七六～五八〇
鏡當	四	辛丑	五八一～五八四 (新羅人来從筑紫至播磨焼之)	勝照	四	乙巳	五八五～五八八
端政	五	己酉	五八九～五九三 (自唐法華經始渡)	告貴	七	甲寅	五九四～六〇〇
願転	四	辛酉	六〇一～六〇四	光元	六	乙丑	六〇五～六一〇
定居	七	辛未	六一一～六一七 (注文五十具從唐渡)	倭京	五	戊寅	六一八～六二二 (二年難波天王寺聖徳造)
仁王	十二	癸未	六二三～六三四 (自唐仁王經渡仁王会始)	僧要	五	乙未	六三五～六三九 (自唐一切經三千余卷渡)
命長	七	庚子	六四〇～六四六	常色	五	丁未	六四七～六五一
白雉	九	壬子	六五二～六六〇 (国々最勝会始行之)	白鳳	二三	辛酉	六六一～六八三 (対馬採銀觀世音寺東院造)
朱雀	二	甲申	六八四～六八五 (兵乱海賊始起又安居始行)	朱鳥	九	丙戌	六八六～六九四 (仟陌町収始又方始)
大化	六	乙未	六九五～七〇〇				

覽初要集云皇極天皇四年為大化元年
 已上百八十四年々号卅一代(不)記年号只人傳言 自大宝始立年号而已

翻刻追文 飯田満磨
 監修校訂 古賀達也
 平成十四年五月二二日

「解説・資料編」

解説：遠国（おんごく、えんごく）とは、律令国の等級区分の一つである。古代日本の律令制の下において、地方行政区画の一環として、畿内からの距離によって国を分けた。その結果、「遠い位置にある国」が遠国とされた。出典: ウィキペディア

解説：令制国の成立は、昭和 42 年（1967 年）12 月、藤原京の北面外濠から「己亥（つちのとい、きどのいのしし、きが い）年十月上埭国阿波評松里□」（己亥年は西暦 699 年）と書かれた木簡「上埭国（現千葉県）阿波評（安房地）の松里とある。よみ：かずさのくに あはのこほり まつのさと：右図」が掘り出され郡評論争に決着が付けられたとともに、『日本書紀』にある大化の改新の諸政策は後世の潤色であることが判明しており、多くの令制国が確実に成立したと言えるのは、大宝元年（701 年）に制定された大宝律令からである
出典: ウィキペディア



解説：『旧唐書くとうじょ』には、
読み下し文（部分）

- ・倭国伝には次のようにあります。「注：倭国はいにしえの倭奴国のことである。」
- ・また日本国伝には次のようにあります。「日本国は倭国の別種である。」
「日本は古くは小国だったが、倭国の地を併合した。・・・とあります。
さらに、彼らは「我が国の国境は東西南北、それぞれ数千里あって西や南の境はみな大海に接している。東や北の境は大きな山があってそれを境としている。山の向こうは毛人の国である。」と言っている。・・・とあります。

注：倭国はいにしえの倭奴国のことである。

「読み：倭・・・ワ(呉)(漢)wo 倭・・・イ(呉)(漢)wei」

注：九州志賀島出土の「漢委奴国王印（かんのいどこくおうのいん）があります」

読み方：宗主国＋国名＋官号 → 漢＋委奴国＋王

読み：委・・・イ(呉)(漢) 奴・・・ド(漢)ヌ(呉)

2019.2.4 BS-TBS につぼん！歴史鑑定 福岡市博物館 米倉秀紀

解説：『旧唐書くとうじょ』倭国伝・日本国伝に、倭国は「貞観 22 年（648）の上表」が最後になり、日本国は、「長安 3 年（703）の粟田真人が来朝して国の特産物を献上した」事が、朝貢の最初になっていますので、648 年～703 年の間に、国の盟主が交替したと考える事ができます。701 年には、大宝律令が完成し、国の行政区域も評から郡へ変更され、国郡里制が成立した。事が読み取れます。

「解説・資料編」

解説：「古事記・日本書紀」神話の中で「イザナギとイザナミ」の国産み神話の島々は瀬戸内海を含む日本海側の西日本エリア（佐渡島含む）となっています。

つまり「古事記・日本書紀」はこの西日本エリアの出来事であり、この時点での王権（王朝）の勢力範囲と考えると現実的です。

だから日本書紀の国産みの島々も時代で変化していると思われます。

実は、神話の中で天降(下)りは三回（新羅、出雲、筑紫）ありますが、三回ともこのエリア内です。高天原から天降る際に中継地なしに直接に舟で行けるところと考えると「朝鮮半島南部・壱岐・対馬」のどこかもしくはこの領域が、高天原（アマ国）かもしれません。アマ国から下るからアマ下りです。ちなみに壱岐には天ヶ原（あまがはら）海水浴場があります。

解説：国産み神話

『古事記』、『日本書紀』を国産み順に比較したものである。

古事記	日本書紀					
	本文	一書第1	一書第2	一書第3	一書第4	一書第5
淡道之穂之狭別島	淡路洲	大日本豊秋津洲	淡路洲・淡洲	淡路洲	淡路洲	淡路洲
伊豫之二名島	大日本豊秋津洲	淡路洲	大日本豊秋津洲	大日本豊秋津洲	大日本豊秋津洲	大日本豊秋津洲
隠伎之三子島	伊豫二名洲	伊豫二名洲	伊豫洲	伊豫二名洲	伊豫二名洲	淡洲
筑紫島	筑紫洲	筑紫洲	筑紫洲	億岐洲	筑紫洲	伊豫二名洲
伊岐島	億岐洲・佐度洲	億岐三子洲	億岐洲・佐度洲	佐度洲	吉備子洲	億岐三子洲
津島	越洲	佐度洲	越洲	筑紫洲	億岐洲・佐度洲	佐度洲
佐度島	大洲	越洲	大洲	壹岐洲	越洲	筑紫洲
大倭豊秋津島	吉備子洲	吉備子洲	子洲	對馬洲		吉備子洲
吉備兒島						大洲
小豆島						
大島						
女島						
知訶島						
兩兒島						

上図は、イザナギ、イザナミが生んだ大八州（島）おおやしまの国とされます。古事記は、本文のみですが、日本書紀には、本文の他一書第1～一書第5までの説があります。大八州の国といっても、一書第4は7州、一書第5は9州となっています。この表の中に作った主体を見たのが通説です。つまり大日本豊秋津州（大和）が中心となって作ってきたと考えています。

しかしこれらは作った主体は外にあって、8つの子分の国（州）を作ったと考えると見え方がだいぶ違ってきます。出雲王朝は隠岐から始まって大国（州）に移ったと考えられます。また九州の王朝は、壱岐・対馬を中心にして始まったと考えられます。

表の古事記を見ますと大国（大州）がありません。これは出雲時代の国産み神話と考えられます。また日本書紀の本文から一書第5の中で、大国（大州）がないのは、出雲時代の国産み神話であり、壹岐州、對馬州がないのは、九州王朝時代の国産み神話であり、大国（大州）と壹岐州、對馬州がない（一書第1）のは、この3国が中心の国産み神話と考えられます。王権は、時代とともに変化（推移）していると考えられます。

解説：『魏志倭人伝』

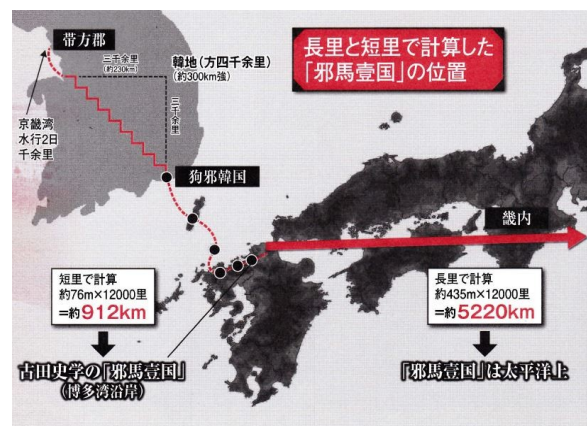
西晋の陳寿により3世紀末（280年（呉の滅亡）-297年（陳寿の没年）の間）に書かれ、陳寿の死後、中国では正史として重んじられた。

読み下し文（部分）

・倭人は帯方の東南大海の中にあり、山島に依りて國邑をなす。旧百余國。漢の時朝見する者あり、今、使譯通ずる所三十國。（略）南、邪馬壹國に至る、女王の都する所、水行十日・陸行一月。（略）郡より女王國に至る、萬二千余里。

解説：原文に「到其北岸狗邪韓國七千餘里」とあります。女王國まで、残り五千余里ですので、魏志倭人伝をそのまま素直に読めば北九州（博多）あたりまでしか行けない計算になると思います。

解説：『魏志倭人伝』の「邪馬壹國に至る、女王の都する所」と『後漢書東夷伝』の「その大倭王は邪馬臺国に居る。」について、邪馬壹國はエリア（例えば東京都）であり邪馬臺国はポイント（例えば皇居）を指すものと考えられます。さらに『魏志倭人伝』のころは、天子を指す言葉として「臺」を使用しており、天子に合うことは「臺に詣でる」とあります。卑字を使っている東夷伝倭人の条に天子を指す「臺」を国名に使うことは到底考えられません。なお国名の「邪馬壹國」は『魏志倭人伝』だけで使用されています。現在残っている版本全てが、「邪馬壹國」となっているとのことです。



「解説・資料編」

解説：大祓詞・大祓式（おおはらえしき）とは：毎年旧暦の六月と十二月の晦日（みそか）に御所の朱雀門（すざくもん）で行われた「大祓式」で皇族以下百官に宣下した祝詞が「大祓詞（延喜式〔927年〕）」です。（中臣祭文なかとみのさいもん、中臣祓なかとみのはらへとも言われます）

祓物（はらえつもの）を出して、祓戸の神の神威によって罪穢（つみけがれ）を解除（げじょ）する儀式であり、半年毎に恒例のものとしておこなわれるので「二季の祓にきのはらえ」と称します。大祓式で唱えられる祝詞が「大祓詞」（おおはらえのことば）です。

大祓は六月と十二月の末日に半年間の罪や穢（けが）れを祓（はら）うもので、イザナギノ命の「禊祓みそぎはらえ」が原型です。

大祓詞を奏上して、身体や心（精神）に滞（とどこお）った「汚穢（おえ）」を、ハラエとミソギでぬぐい去ります。「ハラエ」は、大麻（おおぬさ）を用いて祓い、「ミソギ」は水で身体を洗います。

大祓詞は大まかに、天皇の命により祓の神々に、罪、災い、汚穢（おえ）を移し、海原に出て流し捨て去る、という内容です。

「これは天皇の命で実行したために、身に付いた罪、災い、汚穢（おえ）を祓うことで、天皇が（天皇のために働いた）家来たちのために行う儀式のことです。」

送り仮名として使われている漢字は万葉仮名で、約 900 字の漢字で成り立っています。

「祓」の行事は神話にも語られており、もっと以前からおこなわれていたが、大祓詞の成立は平安期以前といわれています。

大きく二段に分かれていて、前段は豊葦原瑞穗国(とよあしはらのみずほのくに)、つまり日本国の成り立ちが語られ（いわゆる天孫降臨説話が語られています。）、後段では「祓」をおこなうと罪穢がどのように消滅するかが語られています。文体は「宣命体」です。天皇が大衆に降ろした命令ということ。

宣命（せんみょう）とは、天皇の命令を漢字だけの和文体で記した文書です。そしてその文体を宣命体（-たい）といい、その表記法を宣命書（-がき）、また宣命を読み上げる使者を宣命使（-し）、宣命を記す紙を宣命紙（-し）といいます。

かつて大祓詞は大祓式の参列者に向けて読まれたものでしたが、今日では神に向け奏上するようになりました。

解説：二倍年暦」について

『魏志倭人伝』の伝えられる写本の中には、「五世紀」南朝「劉宋」の史官であった「斐松之」という人物が他の史書を参考にして「注」をつけたものがあります。その中に『魏略』という書からの引用があり、「倭人、春耕秋収を記して年紀となす」という文章が書かれてあります。これについては「年紀」が「年数」を意味するものであり、「春耕」から「秋収まで」を計ってそれを一年としているという意味と考えられます。

資料：古代の天皇の寿命 表 古事記（日本書紀） ○80才以上

○	1	神武天皇	137(127)
○	2	綏靖天皇	45(84)
	3	安寧天皇	49(57)
	4	懿徳天皇	45(77)
○	5	孝昭天皇	93(113)
○	6	孝安天皇	123(137)
○	7	孝靈天皇	106(128)
○	8	孝元天皇	57(116)
○	9	開化天皇	63(111)
○	10	崇神天皇	168(120)
○	11	垂仁天皇	153(140)
○	12	景行天皇	137(106)
○	13	成務天皇	95(107)
	14	仲哀天皇	52(52)
○	15	応神天皇	130(110)
○	16	仁徳天皇	83(110)

解説：「古代人の寿命」（ここでいう 30 歳は、15 歳以上生存した人間の寿命です。）

縄文人の場合は、30 才くらいと考えられています。これは、貝塚から発掘される骨から確定できるといわれます。しかし、弥生時代の人骨は発掘されること自体大変少なく、弥生人の骨は土に帰ってしまうといわれます。縄文人は、貝塚の近くに骨を埋葬しました。カルシウム分の多い土に埋葬された骨は、土に帰らず残るといわれます。

一方、弥生時代は稲作が始まっています。貝塚のようにカルシウム分の多い土には埋葬されなかったので、弥生人の骨は土に帰ってしまったのです。佐賀県の吉野ヶ里遺跡は有名ですが、発掘された人骨によると、弥生人は渡来系らしい特徴を備えているといわれます。縄文人に比べると背が高く、平均寿命は 30～40 歳ぐらい。遺物には紐のついた毛髪もあり、髪を結っていたこともわかります。

15 歳以上に達した者の平均死亡年齢の時代変遷は、人口問題研究家の小林和正氏による

縄文時代：男 31.1 歳／女 31.3 歳	弥生時代：男 30.0 歳／女 29.2 歳
古墳時代：男 30.5 歳／女 34.5 歳	室町時代：男 35.8 歳／女 36.7 歳
江戸時代：男 43.9 歳／女 40.9 歳	（古人骨より推定）

1891～98 年調査：男 55.7 歳／女 57.1 歳

1965～66 年調査：男 70.3 歳／女 75.0 歳

解説：国造本紀【こくそうほんぎ】は、『先代旧事本紀(せんだいくじほんぎ)』の巻第 10 にあたる一巻の書。『旧事本紀』は聖徳太子の撰(せん)という序文を有するが、平安初期につくられた偽書とされる。しかし、そのなかの巻第 3「天神本紀」の一部、巻第 5 の「天孫本紀」、それにこの「国造本紀」は、他のいずれの文献にもみえない独自の所伝を載せていて注目される。「国造本紀」は、大倭国造(やまとくにのみやつこ)以下全国で 130 余りの国造を列举し、それぞれに国造任命時代、初代国造名を簡単に記したものである。それらのなかには和泉(いずみ)、摂津、丹後(たんご)、美作(みまさか)など後世の国司を記載したところもあり、また无邪志(むさし)と胸刺(むさし)、加我(かが)と加宜(かが)など紛らわしいものもあるが、概してかなり信用できる古伝によっていると思われ、古代史研究の貴重な史料となる。出典：日本大百科全書(ニッポニカ)「国造本紀」

全国の銅鐸出土数

国別	出土数	I 菱環鈕式	II 外縁付鈕式	III 偏平鈕式	I + II + III [聞く銅鐸]	IV 突線鈕式
出雲	50	1	37	10	48	
摂津	34		12	14	26	7
淡路	15	1	5	2	8	1
河内	18		1	11	12	4
大和	19		7	6	13	5
紀伊	38		3	13	16	14
讃岐	20		4	7	11	1
阿波	41		3	22	25	8
近江	36		3	2	5	22
三河	28		1	1	2	11
遠江	29		1		1	27
その他	135	2	32	38	72	43

・国別で出土数の多い地域(≧15)のみを示した。うち型式の判明分をⅠ～Ⅳ式に分類。

・Ⅰ～Ⅲ式およびⅣ－1式：「聞く銅鐸」、Ⅳ－2～Ⅳ－5：

「見る銅鐸」[佐古和枝氏作成の分布図より]

千葉県の小銅鐸

No.	遺跡名	所在地	出土状況	高さ(cm)	鈕 鱗	分類	廃棄時期	備考
1	大井戸八木	千葉県君津市大井戸	土壌墓	9.5	有 無	C	弥生後期	土壌墓、銅釧・管玉・勾玉
2	中越	千葉県木更津市大久保	住居跡	6.4	有 無	C	古墳出現期?	内突帯、有孔石製品付(舌か)
3	文脇	千葉県袖ヶ浦市野里	木棺墓	10.8	有 無	C	弥生後期	内突帯、管玉・小玉
4	水神下	千葉県袖ヶ浦市奈良輪	旧河道	6.3	有 無	C	弥生末~古墳出現期	銅鏡・石製垂飾品伴出
5	天神台	千葉縣市原市村上	住居跡	6.8	有 無	C	古墳前期	下部欠失再加工か
6	川焼台1号	千葉縣市原市草刈	住居跡	12.3	有 有	B	弥生後期	突線鈕、袈裟襷文
7	川焼台2号	千葉縣市原市草刈	住居跡?	9.8	有 有	B	古墳出現期~前期	突線鈕
8	草刈I区	千葉縣市原市草刈	住居跡?	5.0+	無 無	C	古墳前期?	内突帯
9	草刈H区	千葉縣市原市草刈	方墳周溝内土壌	5.9	無 無	C	古墳前期古段階	朱壺伴出

上記以外

福岡県 11	佐賀県 1	大分県 2	熊本県 1	徳島県 1	香川県 1	鳥取県 2	岡山県 3	福井県 1	石川県 1
兵庫県 2	大阪府 4	滋賀県 2	三重県 2	愛知県 2	静岡県 5	神奈川県 3	東京都 2	群馬県 1	栃木県 1